

# 浄土

臨時増刊号

第四十九卷

昭和十年五月二十日 (第三編郵便物附) 毎月一曜一日発行  
昭和二十四年四月二十八日 發行者 (株) 廣済堂雜貨 第三十二号  
昭和五十八年二月二十日印刷 昭和五十八年一月二十五日發行

臨時増刊号



前進座『法然』上演記念号

岸信宏監修／藤堂恭俊・戸松啓真編  
定 法然上人全集 既刊1・7巻  
各二、五〇〇円  
採本善隆編 B5判／全四巻／価六〇、〇〇〇円

浄土宗大辞典

藤吉慈海著 B6判／上下／揃価二、八〇〇円

法然上人御法語講話

藤吉慈海編 B6判／価一、五〇〇円

法然上人法語集

藤吉慈海編 B6判／上下／揃価三、〇〇〇円

往生礼讃偈講話

人を知る

法然上人ものがたり

いちようの木はのびる

高橋良和著 A5判変形／上製／定価九〇〇円

教えを知る

浄土への道 法然上人法語抄

大室了暗著／文庫本サイズ／並製／定価一、〇〇〇円

東洋文化出版

東京都千代田区三崎町2-14-6  
☎03(234)0321 東京3-89241

山 喜 房

東京都文京区本郷5-28-4  
☎03(811)5361 東京0-1900

好評増刷／一セット二一、六〇〇円／全12巻

各巻一、八〇〇円／千三〇〇円

仏教説話文学全集

中村元編／一セット三五、〇〇〇円／全10巻

各巻三、五〇〇円

現代仏教名著全集

坪井俊映著／定価九、五〇〇円／千三五〇円

法然浄土教の研究

坪井俊英著 価七、〇〇〇円 須賀隆賢著 価一、五〇〇円

浄土三部経概説法然再発見

長田芳一画／五雨みなこ文

絵本 ほうねんさま

B5変型／定価三〇〇円

右近れい子画／福嶋智著編

絵本 おじどうさま

B5判／七二頁／定価四〇〇円

仏教まんが・教育図書

多数刊行

大 道 社

東京都千代田区飯田橋1-11-6  
☎03(262)5944 東京1-8247

隆 文 館

東京都千代田区神田和泉1-9  
☎03(861)9605 東京4-153102



一月かげー 松涛達文画



# 浄土臨時増刊号



月かげのいたらぬ里はなけれども

ながむる人のこころにぞすむ

## 目次

## 次

法然上人頌……………佐藤春夫作……………(2)

法然上人に触れよう……………武田 脩彦……………(4)

念仏による世直しを……………大田 秀三……………(5)

### 法然上人物語

——『法然』劇のあらすじ——……………田 島 栄……………(6)

『法然』劇の用語解説……………宝 田 正道……………(36)

前進座の歩みとともに……………高 橋 良 和……………(44)

法然上人讃仰と浄土の世界……………宮 林 昭 彦……………(47)

編集後記……………(52)

法然上人頌

佐藤春夫作

光明は限なくそそぐ

限りなき 命に生きよ

人間の知恵勿たのみそ

み恵みは人を扱ばず

ただ頼め阿弥陀仏と

をしえたる

いみじさよ

我らが祖師や

法華經の人生と理想

煩悩を絶てとは告らず  
みだれたる心もゆるし  
人間の性のまにまに  
み仏の国に往き生く  
この道は誰かひらきし

なさけある  
慕わしの  
われらが祖師や

# 法然上人に触れよう

浄土宗宗務総長 武田 喬彦  
たけ だ ちょう げん

法然上人は乱世に現れた巨大な「光」であり、世直しの新宗教を掲げて大衆を救った革命の人でありました。その人格のおおらかさ、学徳の広さ深さは、容易につかみえないものがある反面、その教えのやさしさはあまりにも凡夫本位であったために、かえってそのお人柄に触れ難く、敬遠を余儀なくされたものとも思われます。群盲象を撫でるの愚に陥ることを避けて手をつけるのを恐れていたのかもしれませんが。

ともあれ、前進座があえて『法然』劇に取り組み、梅之助丈が「光」ともいべき難役「法然」に扮して上演に踏み切ったことは、劇団始って以来の快挙であるとともに、また大変な決断と力と困難の伴う企画であったろうと思います。

幸い、法然上人のお誕生八百五十年記念の慶讃劇として、昨年来、京都・東京と未曾有の好評裡に公演が行われ、本年はさらに大阪、名古屋その他、列島巡演の日程が進められつつあります。まことに慶祝に堪えません。

『浄土』誌が、これを側面的に援助する形で芝居のあらすじや科白の難語解説などを中心とした「法然上人特集号」を臨時増刊されたことは、まことに時宜を得た教化策として満腔の敬意と感謝を捧げたいと思います。観劇者はもとより、その機に恵まれない方々も、ぜひこの一冊を活用して法然上人のお人柄の一端に触れ、念仏信仰増進の糧に資していただきたいと存じます。

# 念仏による世直しを

浄土宗教学局長 おお大 た田 しゅう秀 さん三

血に汚れ惡に染<sup>そま</sup>つて生死の海を漂う乱世の人々の心を、念仏という太い絆<sup>きずな</sup>で、しっかりと繋<sup>つな</sup>ぎとめてくれた聖<sup>ひじり</sup>、それが法然上人であらう、と私は思います。その法然上人の意志と力を、八百年後の今日、舞台の上で実演してみせてくれるのが、前進座の記念劇『法然』であります。

上人に扮する主役の梅之助丈をはじめとして、ステージに立つ役者たちとその仕草を見守る観客たちとの間には、最初、演ずる者と観る者との対立空間があり、僧俗貴賤老若男女が織りなす客席の一つ一つにも、各別の観劇態度が明らかに見え隠れしております。

ところが、劇が進行するにつれて、演技に熱が加わり、人々の眼と心は次第にステージに集中、念仏の一声ごとに観客からも同唱の渦が沸き上り、ついに舞台と客席とは混然一体、時代も場所も階層別さえ忘れて、念仏による法悦と興奮の坩堝<sup>もつぼ</sup>と化してしまうのです。演技力とか芸の力とかいうのかもしれないが、とにかく実在の法然上人も、このように、僧俗貴賤老若男女の心を、差別なき一群一体の融和状態の中で力強く収攬<sup>しゅうらん</sup>してゆかれたに違いありません。

しかし、一步劇場を出て現実の社会を見ると、どうでしょう？ 日本はまだ乱世に近く、不沈空母か豪華客船か存じませんが、上甲板、船底、機関室それぞれ勝手に動いているだけで、バラバラの感じを受けます。これでは前へ進まず、危険な海上を漂うばかりでしょう。『法然』劇をもっと広く観てもらって、念仏による世直しを急ぐ必要を痛感する次第です。



# 法然上人物語

『法然』劇のあらすじ

田島

栄

△プロローグ△漆間時国の館

法然上人は、今から八百五十年前に美作国久米南条稻岡庄（現在の岡山県久米南町、誕生寺の地）に生まれました。子供の頃の名前を勢至丸といいます。父はこの地方の豪族で漆間時国、母は秦氏という名家の出身です。

劇は勢至丸が九歳の時からはじまります。ある夜のこと、日頃から時国と仲の悪かった明石源内武者定明という男が、部下をひきいて襲ってきました。勢至丸はけなげにも弓矢をとって闘いますが、不意をうたれた味方は敗れ、時国は重傷を負い、もはやこれまでと遺言します。

「勢至丸、けっして敵を恨んではならない。もし恨みをもって敵を討てば、仇の子はまたお前を恨んで生命を狙う。討ちつ討たれつ人の恨みは幾世も続くであろう。お前は恨みを捨て、人としてのまことの道を求めてくれい」――



父の仇を討ちたい、とはやる勢至丸と、これを制止する母。

しかし、勢至丸は武士の子です。父を殺した憎い仇を討ちに行こうとします。母は泣きながらも、わが子をきびしく諫めます。そして、「どのようなことがあっても、生きて、生きぬいて、世の人のしあわせのためにつくすのです」と、さとすのでした。やがて、勢至丸は母とも別れ、家臣の板之助・お社の夫婦に守られて山深い菩提寺へ逃れていきます。

父の遺言、それに母との悲しい別れ……、それは幼な心に深く刻みこまれ、生涯けっして忘れることがありませんでした。

その後、勢至丸は故郷を旅立ち、遠く離れた叡山に登り、出家をして仏道の修業にはげみました。

しかし、その頃の僧侶の多くは、出世のための学問や、有名になるための修業にむちゅうで、権力を欲しがって武力による殺しあいまでするようなありさまでした。理想に燃える若者は絶望し、十八歳の時に黒谷の別所というところに移り住みます。欲望を捨てて、しずかに仏法を学ぶためです。師の叡空上人はそのころさしを喜んで、法然房源空という名をつけてくれました。

#### △第一幕第一場／嵯峨釈迦堂・清涼寺

生きることの苦しみ、死ぬことの恐ろしさ……、人間は永遠にこの悩みから救われることがないのだろうか？ 希望を胸にさわやかに生き、未来を信じ安心して死ぬことができないものだろうか？ 人間は何を心の支えとして暮したらよいのか？……。



釈迦堂で諸人とともに求道祈願する法然。

若き法然は痛切に苦しみ悩み続けます。黒谷での熱心な学問もきびしい修業も、心に光明をもたらしてはくれませんでした。

しかし、法然は屈しません。自分の生きるべき道は仏法の中に必ず示されているはずと信じて、真理を求め続け、嵯峨の釈迦堂に参籠します。二十四歳の時のことです。

「なぜだ、なぜ父は死を前にして敵を許す心になれたのか。なぜ私に仏門へ入れとすめたのか。なぜだ……。まことの道を求めよとの父の遺言、世の人のしあわせのためにつくせとの母の言葉……。私は父母の願いをはたそうとけんめいに修業した。およそ眼にふれるかぎりのあらゆる仏典をむさぼり読み、すぐれた師のもとで学んできた。しかし得たものは、悟りどころか迷いばかりだ。他人のことどころか自分一人がどう生きたらよいのかもわからない……。南無釈迦牟尼仏、なにとぞ私の生きるべき道を示したまえ」――。

法然が祈願する立像は、むかしお釈迦様の生前の姿を見て作られ、インドから中国、日本へと渡来し、三国伝来の生身の釈迦如来と尊ばれて、ひろく貴賤男女の信仰のまゝとした。今日もその前には、乱世にあえぐ民衆の、み仏に救いを求めるひたむきな姿がありました。戦場で敵を殺した男、夫や息子を殺された女、飢えに苦しむ者、貧しさゆえに赤子を捨てた女、人を傷つけ欺した男……。彼らは現世を呪い、犯した罪のむくい地獄へおちるにおびえて歎き悲しみ、問いかけます。

「お坊さま、この世の中は生きる値うちがあるものでしょうか？」  
しかし、法然には答えることができません。

四郎という名の若い盗人が捕えられたのを助けて意見をしますが、四郎は「山奥へもって難しい修業ばかりしている坊主なんぞに娑婆しやばの人間の気持がわかってたまるか」と悪態あくだをついて逃げ去ります。

だが法然は、民衆とのふれあいの中で知りました。「苦しみ悩んでいるのは自分だけではない」と。そして、世の中へ向って大きく眼を開いていくのです。

それから、法然は、奈良へ勉強に行く道筋で、世の中のきびしくむごたらしい現実と、その泥沼ぬしやにうごめく人々の裸の姿に、肌身で接しました。保元の乱で戦いに敗れ、泣き喚わめきながら刑場へひかれていく落人。わずかな食べ物を奪いあって争う男女……。地獄絵ぢごくえさながらの悲惨さに眼をおおいたくなるほどです。だが法然は、自分も濁流だくりゅうの中に生きる人間の一人であることを、はっきりと自覚するのです。

## △第二場／西塔黒谷の別所さいとうくろやに べつしよ

法然は、奈良へ、醍醐だいごへ、宇治へと、仏法の真理を求めてさまよいます。各地の高僧やすぐれた学者に会って教えを乞い、また仏教の書物を探し歩き、むさぼり読み、古今ここんのありとあらゆる名僧の思想や宗門の教義を学びつくします。しかし、誰一人、現世にふさわしい生きた仏法を教えてくれる人はなく、法然自身の生きる心の支えとなるような教義にめぐりあうこともできませんでした。人々は法然の学問や知識が深くひろいことに驚いて、「智恵第一の法然房」とはめたたえますが、法然は学べば学ぶほど自分の愚かさを思い知り、悲しみが深まるばかりでした。



法然を訪ねてきた栃之助を迎える  
釈空（右）と信空。

失意のはてに黒谷にもどり、報恩蔵ほうおんざうというお経の蔵にこもって、来る日も来る日も経巻を読みふけます。

この時代の日本仏教の諸宗はすべて聖道門しょうどうもんといって、戒律かいりつをきびしく守り、学問や修業にはげんでいっさいの欲望や迷いを断ち切り、生きながら仏の境地に達することを目的としたものでした。

このような法は論理としては理解できても、実行するとなると、悩み多き凡人にはとても難しく、不可能に近いことです。

法然の求めてやまなかったのは、このような高僧聖賢せいけんの法ではありません。人間が人間らしく生きる道、自分をふくめたすべての凡人が一人ももれなくしあわせになれる教えでした。

師の釈空は旧来の仏教を信奉する人です。新しい道を見出そうとする法然と衝突し、はげしい論争となります。弟弟子おとうとでしの信空は、はらはらしますが、二人とも真理の前ににはけっして妥協しません。

故郷から栃之助が訪ねてきました。喜ぶ法然……。だが、それは母の死のしらせでした。

法然は、ひとり杉木立の間をさまよいます。

「私は一日として母を思わぬ日はなかった。父の遺言と母が、故郷から見守っている……。そのことに励まされ支えられて修業に耐え、道を求めてきたのだ。母上……」地に伏して号泣ごうきします。

だが、悲しみの底から立ち上がり、報恩蔵にこもって書物をひらき、一心に読みは



報恩蔵の前で専修念仏への回心を告げる黒谷の朝。

じめます。

黒谷に朝が訪れました。白い朝霧がただよい、鶯の声<sup>うぐいす</sup>が谷間にこだまします。水くみに出て来た信空がふと見ると、報恩蔵の灯りはまだ消えず、徹夜で書を読む法然の声が聞えてきます。やがて扉が開いて法然が現われ、西方に向けて合掌し、高らかに念仏を称え<sup>となと</sup>ました。思わずひれ伏す信空――。

法然は三十年にも及ぶ求道の精進<sup>ぎょうじん</sup>のすえに、初めて光明を見出したのです。

「信空よ、善導大師<sup>ぜんどうだいし</sup>は『観経疏<sup>くわんぎょうしよ</sup>』の中で、一心に阿弥陀仏の御名を称えることが、もっともみ仏の願い<sup>ねがひ</sup>にかなう正しい行いであると説いている。弥陀の本願とは、阿弥陀仏がいっさいの生きとし生けるもののしあわせのためにたてられた、四十八の願いのことをいう。その第十八願に、いかなる人間でも真心から私を信じ、浄土へ生まれたいと願って念仏を称えるならば、必ず浄土へ往けるであろう。もし一人でも往生できぬ者があれば私は仏にならぬ、と誓われたことである。この二つを併せ思えば、ただひたすらに念仏を称えるとき、み仏はわれらを導き給うこと疑いない――」。

承安五年（一一七五）の春、法然上人四十三歳、浄土宗の立教開宗を告げる朝でした。

その頃、西山の広谷<sup>ひろやに</sup>という所に、遊蓮房円照<sup>ゆうれんぼうえんしやう</sup>という名前の念仏聖<sup>ひんじやう</sup>がいました。後白河天皇の側近として飛ぶ鳥落す勢いの信西入道の息子に生まれ、若くして信濃守になりましたが、平治の乱で父を殺され、自分も讒言<sup>ざんげん</sup>のために流罪にされました。人の世の無常を感じて出家し、はじめは多くの仏典を学びましたが、今は経巻一巻すら持た



遊蓮房の臨終。十念を助声する法然と介護する信空。

ず、ひたすら念仏にはげんでいる人です。

弥陀の本願にめぐりあつて専修念仏の身となった法然は、師に別れを告げ、信空を連れて広谷を訪れます。そして二年の後――。

### △第三場▽遊蓮房の草庵そうあん

遊蓮房は近くの善峯ぜんぽうの別所に移り、病いに臥し、法然と信空にみとられて臨終を迎えようとしています。三人は過ぎ去った二年の思い出を語りあいます。

めぐり会った日の喜び、いっしょに念仏を称えながら深めていった信心、そして友情……。

やがて遊蓮房は、法然にはげまされつつ、念仏十声をとえ、安らかな笑みをうかべて往生します。

法然「南無阿弥陀仏、遊蓮房殿、私は浄土の教えとあなたにめぐり会えたことを、人間に生まれて一番の思い出とするでしょう」

信空……（慟哭とうこくする）

法然「私は今、念仏申す人が浄土へ往生する証あかしをこの眼で確かめた。町へ降りよう」

信空「ええっ、町へ……」

法然「そうだ。このうちは都の町中に身を投じて、たずねきたる人あらば浄土の法のべ、念仏をすすめて生きたい」

信空「しかし師の御房、噂によれば都では平家一門が横暴のかぎりをつくし、病いや飢えに倒れた死人が山をなしていると申します。今の都はこの世の地獄です」



大仏炎上。怒号する重衡と逃げまどう群衆。

法然「知っている、それゆえにこそ私は行く」

当時の日本は、歴史上まれに見る激動の時代でした。藤原一門の貴族たちから政權を奪った平家の武將たちは、天下を握って驕りたかぶり、人々の支持を失ってゆきま

す。そして、源氏の頼朝が東国で、義仲が木曾で兵を挙げ、戦乱の世に入ります。

#### 〈第四場〉東大寺大仏殿

平清盛は、平家にさからう僧兵たちを討伐せよ、と息子の重衡に命じ、重衡は大軍をひきいて奈良に攻め入ります。町も寺院も炎上し、戦火に追われた大勢の老若男女は大仏殿に避難します。

だが、火はここにも燃え移り、人々は炎の中を逃げまどい、泣き叫び、もだえ苦し

み、のたうちまわります。平家の軍兵たちは、民衆を蹴散らし、僧兵たちを斬り倒し、鎧 冑に身をかためた

大将軍の重衡は、勝ち誇って「かかれ、かかれ」と指図します。この戦で、東大寺や興福寺をはじめ、奈良の寺院はおおかた焼失し、焼き殺された民衆は三千五百人もいました。重衡たちの悪鬼のような行いを見聞いた人々は、仏法はここに亡び、末法の世がついに来たのかと恐れおののきました。

仏教では、人間の世の中を、正法、像法、末法の三つの時代にわけています。正法

の世とは、釈迦如来がこの世を去られてから五百年の間をさし、正しい教えが守られ、それを修業する人も悟りをひらく人もたくさんいる時代をいいます。像法の世とは次の千年の間をさし、正しい教えもあり修業する人もいるけれども、悟りをひらく人は少なくなつた時代のことです。末法の世とは、その後の、現代をもふくむ時代をさし、教えだけが残るけれども、まことの修業者はとも少なく、悟りをひらく人はほとんどありません。天変地異があいついでおこり、人々は悪心をいだいて憎しみあい、戦いを好んで、しまいには滅亡への道をたどる、と予言されています。

当時、末法の世が訪れたことを示す凶事が次々におこりました。

源平の合戦がもたらす被害のうえに、地震、洪水、津波、火事、大風、ひでりなどの災害がたびたび襲いかかり、飢饉や疫病がひろがり、盗賊がのさばり、都の内外はもとより遠い地方にいたるまで、民衆の苦しみ歎く声は全国に満ちあふれました。人は希望を失い、飢えや病いに倒れて死ぬ人は数知れず、死人の山で道も通れないと伝えられるほどでした。それなのに、当時の僧たちは、民衆のことを忘れはてて、難しい学問や山中での修業を競争しあい、あるいは権力争いに明け暮れているありさまでした。

そのようなときに、法然上人は山をおりて民衆の中に入り、吉水の庵室といわれる念仏の道場を今の知恩院の場所に開いて、大勢の人々にみ仏の大慈大悲（すべての人間をかぎりなく愛し、そのしあわせを願う心）を伝えたのです。

## △第五場▽賀茂の河原



賀茂の河原。難民たちに語りかける法然。

戦火に家を焼かれた人、災害に身内を奪われた人、疫病に倒れた人、仕事のない人……。今日食べる物もなく、明日への希望も失った不幸な人々が、都の辻や河原にあふれていました。

信空は「このむごたらしい世のありさまを、みつめていくことに耐えられない」と歎きますが、法然は「けっして眼をそむけてはならぬ。時の流れと人の生きざまをじっと眼をこらしてみつめ続けるのだ。人々の苦しみをおのれの苦しみとしなければならぬ」とさとしします。

信徒の茂右衛門とお虎は、私財を投げうって難民に粥をふるまいますが、その米もたちまち底をつきます。

法然は難民たちに語りかけます。

「お聞きなさい。ここからはるか遠い西の方に極楽浄土という美しい国があり、阿弥陀仏というやさしい仏様がおいでなさる。阿弥陀仏は人間を深く愛され、悩みや苦しみを持つ者、不幸な者、愚かな者をあわれみ、私を信じ、私の名を呼ぶ者は、たとえどのような人間であろうともみな守り助けずにはおかينとお誓いなさっています。だから皆さん、阿弥陀様のお言葉を信じて、**「南無阿弥陀仏」**と声に出して頼みなさい。たとえ大地を打つ手ははずれることがあっても、**「南無阿弥陀仏」**と称えて救われない人間は一人もありません」

そして、はげまします。「皆さん、み仏は人間の父であり母なのです。**「南無阿弥陀仏」**と心からその名に頼り声に出して称えるとき、仏様は、必ずあなた方を助けにきて下さる……。私の話がよくわからない方もいよう、だが、わからないままでも、

然。雪の中、瀕死の老婆を励ます法



疑いながらも、まず念仏を称えてみなされ。きっと苦しみをのりこえる力がわいてきます」

雪が降りしきる中に、法然は人々の手を取り、肩を抱きながら、「念仏を心の支えにして、せいっぱい生きぬこう」と説き続けるのでした。

#### △第六場▽八条堀川の御堂

「平家にあらずんば人にあらず」というほどの榮耀榮華を誇った平家の一門も、一の谷の戦で源氏に敗れ、南都(奈良)を炎上させた平重衡は捕えられて都へ送られ、監禁されます。

外には大勢の群衆が押しかけ「多くの堂塔伽藍を焼き払い、三千五百余の男女を殺した惡逆非道の重衡を引き渡せ、八つ裂きにしてやる」と罵りさわぎ、石を投げつけます。

重衡は、恐怖と罪の意識のために半狂乱になって、泣き、笑い、わめきちらします。

法然が現われます。法師武者たちが、「仏法の敵を救おうとは何事ぞ」「ここは通さぬ」と道をふさぎますが、「み仏の慈悲に善人悪人の差別はないはず」との法然の言葉と人格の重みに圧倒されてひき退ります。

しかし重衡は「帰れ、どうせ地獄へ落ちるこの身、説教など聞きたくない」とうそぶきます。

法然は「み仏の慈悲は廣大無辺、罪におののく人間をあわれみこそすれ、罰しよう



重衡は法然の説戒に罪を悔い、念仏信心を誓う。

などとお思いのはずはございませぬ。さあお話しなされ、心の内をありのままにな」とやさしくさすのでした。

重衡は心を打たれて、罪を悔い、許しを乞います。

法然は弥陀の本願をじゅんじゅんと説き、「南無阿弥陀仏、み仏よ許し給え、助け給え、とまごころから称えなさい」と結びます。

重衡は法然の前に泣き伏して、念仏への信心を誓うのでした。

外へ出ると、天野四郎という名の大盗賊が待ちうけていました。むかし嵯峨の釈迦堂であつた若者の後の姿です。

四郎はいいます。「大ぼら吹きめ、重衡のような大悪人が極楽往生などできるものか」

法然は答えます。「私も悪人だ。本来ならば地獄へ落ちる身だが、念仏のおかげでこうして生きている。あなたも、いつでもどこでもよいから念仏を申してみなさいか」

四郎はあざ笑います。「ばかにするな、おれは極悪無残な人殺しで、強欲非道な大泥棒じゃ。それでも念仏とやらをすすめるか？」

法然はにこやかにほえみ、「なほのことすすめねばならぬ。み仏を信じ、念仏を称えるほかに悪人の救われる道はない」と教えますが、四郎は「欺されるものか」といい捨てて消え去りました。

法然上人がはじめた専修念仏(ただひたすらに声に出して念仏を称えること)の教えは、

法然の念仏の勧めに、欺されるものかと囁って去る盗人四郎。



大地にしみわたる水のように都の内外にひろがり、念仏は男女、僧俗、貴賤を問わず多くの人々の中に、生きるよろこびの声となって称えられていきました。

そのため、当時の高僧や学者たちは、法然の人望と教えに興味や疑いを抱いて、法然を招いて法論を挑もうということになりました。

時は文治二年（一一八六）秋のこと（別の説では文治五年）、場所は大原の勝林院——。これが日本の宗教史上有名な「大原談義」で、まさに浄土宗の存亡をかけた問答が行われたのです。

談義の発起人は後の天台座主顯真という人で、参加した人々はいずれも世に知られた名僧や大徳ばかりでした。ほかにも数百人の聴衆が庭にあふれて、一日一夜をかけて続いた問答を、一語も聞きもらさないよう見守っていました。

#### △第七場▽大原の勝林院

本堂の阿弥陀如来を前にして、法然と顯真が向きあって坐り、まわりには金襴の法衣に威儀をただした高僧や、有徳の聖たちがきら星のごとく居並んで、莊嚴な雰囲気をかもし出しています。

問答は朝にはじまり夜を徹し、暁を迎えようとしています。その間、いろいろな宗門の教義の理解について質疑応答が行われ、これからは、いよいよ法然上人の新しい教えについての論議に入ります。

鋭い質問が次々にはなたれ、堂内に緊張がみなぎりますが、法然はおだやかに、だ



大原談義。頭真らから鋭い質問が次々に放たれ、堂内は緊張が漲る。

法然の論旨の中心は、おおよそ三つのことでした。第一は、万民(すべての人間)が苦しみや悩みからときはなたれて、しあわせに生きぬく道は何か? それは弥陀の本願を信じて、ひたすらに南無阿弥陀仏と称えるほかにはない、ということです。

以下の論もみなそのことに帰結するのですが、第二には、八万四千もある仏教の法門の中からなぜ念仏だけを選んだか? その理由です。

み仏は人間の大きいなる父母です。だから子供である人間すべてのしあわせを願っているはず。ところが今までの諸宗の教えは、内容がとても難しく、その上にきびしい掟(おきて)を守り、善行や学問や修業を積みかさねなければならないのです。だから賢く高潔な人物だけしか実行できず、きわめて少数の選ばれた人間しか極楽へは往けません。では、絶対多数を占める、欠点だらけの凡人はどうしたらよいのでしょうか?

仏法に縁なき衆生として見捨てられる運命でしょうか?

法然は説きます。「ありがたいことにみ仏は、われら凡夫の生きる支えとして、誰にでも歩める易しい道を開いて下された。それが易行他力の浄土門です。どんな悪人でも愚かな者でも、けがれ多き身といやしめられる女人でも、煩惱にまみれたまま、いつでもどこでも行える勤めは、阿弥陀仏が一切の衆生を一人も洩らさじと、平等の大慈悲から選びとられた本願の念仏だけです。ただひたすらに弥陀の本願を信じ、南無阿弥陀仏と口に称える念仏こそ、乱世に生きるわれらの救いの光りだと信じます」

第三には「時機相応」の教え(その時代と、その時代に生きる人間に適合した教え)、ということ。

「教えが時機にふさわしいものでこそ、教えは人の中に生き、人は教えによって生か



頭真がまず立って仏前に合掌、  
人二人と念仏を唱和し始める。

されます。教えを生かすには今がどんな時か、今の世に救いを求めているのはどんな人たちか、世と人のありさまをありのままにみつめ、はっきりと知らねばなりません。私は私という人間の裸の姿をみつめてきました。そして、みつめればみつめるほど、今の世に自力の修業で悟りを得ることなど思いもよらない私がわかってきたのです。弥陀の本願を頼みてただひたすらに念仏する、私には他に生きる道がありません」

問答はなおも続きます。諸宗の教義を深く学び信奉してきた高僧たちには、法然の論理は余りにも型破りで新しすぎたのです。

だが、理路整然と、しかも人間のありようの真実にふれる法然の話は、しだいに人の心をゆり動かしていきました。

やがて、頭真が立ち上り、阿弥陀如来の像の前に進み出て合掌します。

「南無阿弥陀仏、南無阿弥陀仏……」

その声に、一人和し、二人和し、次々に唱和しょうわしていきます。

法然もいっしょに称えました。

暁の光が堂内にさしこみ、念仏を称える人々を照らし、包んでいきます。念仏の声は、集まったすべての人々の間にひろがり、本堂の内外をゆるがすほど、大きく力強くなっていきます。

## ／＼第二幕第一场／＼白河の禅房

現在の金戒光明寺の地です。

法然上人六十一歳、叡山を下られてから十八年が過ぎました。

日本の大地に万民のための仏教をはじめて確立された法然を慕って、毎日多くの老若男女が法話を聞きに集まり、念仏を心の支え、希望のとしびとして暮しの中に生かしていききました。また、大原談義や、再建された東大寺での講話がすばらしかったという噂がひろまり、皇族や貴族の中にまでたくさん信徒ができました。

今日も法然は、集った人々を前にしてにこやかに語りかけます。その話は、これまでのどんな名僧の話よりも、実際の生活に即していて、お経も知らず文字も読めない庶民にさえもやさしくわかりやすいものでした。

男甲「お上人さま、酒を飲むのは罪でしょうか？」

法然「本当は飲まないほうがよろしい、しかし、この世のならい……」

男乙「念仏しているうちに、ねむくなって困るときがあるだが……」

法然「眼がさめたらまた念仏をしなさい」

男丙「わしらは毎日魚を食べていますが、往生の障りになるのではないかと……」

法然「魚を食う者が往生するとなれば鵜がするだろう。魚を食わぬ者が往生するとなれば猿がするだろう。そんなことにはかかわりなく、念仏申す者だけが往生できるのです」

女甲「お上人様、月のもののあるときは、お経を読んではいけなんでしょうか？」

法然「いいえ、さしつかえあるとは思われません」

遊女あそびうめが法然の前にひれ伏して訴えます。

遊女琴路ことじ「お上人さま、私共のような罪深い者の救われる道はあるのでしょうか。ど



白河の禪房に、多くの老若男女が、法話を聴聞に集ってくる。

うかお教え下さいませ」

遊女山吹「私のようにけがれた賤しい女にも、み仏のお慈悲はあるのでしょうか」

法然「おのれを卑下してはならぬ。ただひたすらにみ仏を信じることです。私もあなた方のために念仏を申しましょう」

聴聞していた他宗の学僧たちは驚きます。なぜなら、これまでの宗派では、女性はいやしくけがれ多き身で、けっして極楽へは往けないとされていたからです。彼らは法然の教えを「邪法なり」とはげしく非難しました。

法然はいいます。「私は父の遺言と母の願いにはげまされて出家しました。今でも、たとえ一日として、私は母を忘れない、しあわせにしてあげたかった。だから不幸な女性を見ることはつらい、たまらなくつらい……」

み仏の前にはあらゆる人間は平等であり、どのような差別もいっさいない。すべての人間が心安らかにしあわせに生き、死後は極楽へ往くことを願う。これが法然上人の浄土宗の理想です。

日本一の勇士と評判の熊谷真実が訪れて、戦場で重ねた殺生の罪をさんげし、法然の「ただひたすらに念仏申しなされ」との言葉に泣いて喜びます。

熊谷「お上人さま、今一つお伺いいたします」

法然「どうぞ」

熊谷「われらと共に戦場を往来し、倒れた友の魂、また恨みをのんで亡びた敵の魂は、いったいどこをさまよっているのでしょうか。かれら敵味方幾多の靈魂をどうしたら救うことができますでしょうか」

法然「よくぞ申された。み仏は念仏をたむければ亡き人も浄土へ往くことができる  
申しています」

熊谷「まことでございますか」

法然「さよう。人間が憎みあい殺しあう戦は悲しみてもあまりあることじゃ。世の中  
のすべての人が弥陀の本願を知り念仏を称える心になれば、そのようなあさましい  
ことはなくなろう。その時はいつかこよう、いやきつとくる。その日を招来させる  
ことを願って私は念仏申している。そなたは修羅の巷をさすらい現世の地獄の恐ろ  
しさを見てきた。共に手をとりあつて念仏を称えよう、後の世の人々のしあわせの  
ために……」

熊谷「お上人さま……。お上人さま、お願いがございます」

法然「ほう、まだござるのか」

熊谷「なにとぞ、なにとぞ私を、お弟子のはしぐれに加えて下され、お願い申す」

法然「よいとも。法力房蓮生と名付けましょう。蓮生とは仏法のしるし蓮の花の中に  
生きるという意味です」

続いて聴聞の人たちが次々に弟子入りを願ひ出ます。

法然「嬉しいことだ。しかし浄土の教えに出家と在家のわけへだてはありません。家  
族といっしょに念仏を称えながら仕事にはげみなされ」

だが、聖道門の僧侶の中には、法然の人望と専修念仏の隆盛に危機感をいだき、警  
戒を示し、妨害をしようとする者も出てきます。



九条兼実の館。松虫・鈴虫が客人たちに今様を舞ってみせる。

## 第二場 九条兼実の館

前関白太政大臣九条兼実は、政界の実力者でしたが、終生、法然を支持し尊敬し続けた人です。たびたび館へ招いて法話を聞き、師の御房と敬って教えをうけてきました。

法然は兼実の頼みで『選択本願念仏集』を書きました。選択とは選び取り選び捨てるという意味で、阿弥陀仏が仏道のあらゆる行法の中から念仏ただ一つを選びとって本願とした理由を明らかにした、日本仏教史上画期的な重要な書物です。

後に浄土宗の二祖となった聖光房弁長も訪れ、兼実の質問で、法然の弟子となった動機やいきさつを語ります。

まだ少年の面影を残す勢親房源智がとび出してきて、法然と再会します。源智は一の谷の合戦で討死した平師盛の子で、源氏の探索を逃れて母とも別れ、十三歳で法然に入門しましたが、危くなったので兼実の弟の慈円僧正に預けられていたのでした。

後白河天皇の第三皇女・式子内親王が女官の松虫と鈴虫を従えて来訪します。

式子内親王は法然を深く敬慕する佳人で、和歌の作者としても有名です。内親王は法然が作った歌を朗誦します。

月影のいたらぬ里はなけれども

ながむる人の心にぞすむ

熊谷蓮生房と、安楽と住蓮という武士上がりの僧も集まって、なごやかに語りあ



吉水の庵室へ、久しぶりに師の法然を訪ねて再会を喜ぶ勢観房源智。

い、松虫と鈴虫があでやかに今様を舞います。

### 第三場 吉水の庵室

吉水は法然上人が永年住まわれた本拠でした。その頃、法然のそばには、信空、証空（西山派の祖）、聖光、源智等々、すぐれた弟子が数多くいました（舞台には登場しませんが、隆寛、感西、金光、幸西、禅勝、長西、そして聖寛や重源なども門下有名です）。

法然と弟子たちの日常は、きびしい求道の精進（しやうじん）の中にもあたたかい師弟の交流があり、若い僧たちはぐんぐん成長して行きました。

法然は、戦乱のために父を失い母と別れた源智を、わが子のようにいつくしみました。幼い頃、同じような悲しい思いをしたからでしょう。

安楽は、恋の悩みをうちあけます。

熊谷が怒って訴えます。

熊谷「誰かがこんな話をしているのです。熊谷のような無知無学の荒武者や阿波の介のような愚か者には、他の学問や修業を教えても仕方がないから、お師匠さまは念仏ばかりでよいとおっしゃるのだ。もう少し修業も積み知恵もある者に向っては、何も念仏ばかりしているとおっしゃるまい……」

法然「皆に聞く、阿波の介の申す念仏と、私の申す念仏といずれが勝っていると思うか」

一同「……………」

聖光「申すまでもなく師の御房の念仏が勝っていると考えます」

法然「そなたたちは日頃浄土の教えをなんと聞いている。阿波の介も仏助けたまえと思つて念仏し、この源空もそう思つて念仏する、さらに差別はないはずである。思うにあなた方は本願を信ずることがまだ足りぬ……。聖光御房、そなたはわざと間違えた答えをいわれましたな」

聖光「恐れ入ります。実は、私は生まれ故郷の鎮西の地に念仏を拡げ、念願にしております。近く帰国のお許しを願ひ出るつもりでしたが、お別れにあたってお師匠さまからまことの念仏の心を聞き、私の信心の支えにしたかったのでございます」

法然「うむ。そなたには『選択集』も授け、私の知るかぎりの浄土の宗義はすべて伝えた。どうか私に代つて西国の人々にみ仏の本願を伝えてほしい」

法然は聖光に、浄土宗の布教者の真の使命と心得を、旅立ちのはなむけの言葉として贈りました。

町女房風の女が訪ねてきます。かつての遊女山吹で、法然の教えのおかげで苦界から抜け出せたお礼に来たのです。

山吹「お上人さま！」

法然「おう、そなたはいつぞやの……」

山吹「山吹でございます……」

法然「忘れてなるものか。朋輩の女性はどうか？」

山吹「琴路さんは病いでなくなりました」

法然「……………」

山吹「でも、お上人さまのおかげで極楽へ往ける、とおだやかな顔に笑いさえ浮べ  
て、お念仏を称えて……」

法然「そうか、そうでしたか。皆も聞いたか、なんと美しい話ではないか」

源智「はい」

法然「琴路は苦界の底で泣きながらも、けなげにも最後まで念仏を信じて生き、み仏  
の浄土へ迎えられて往ったのだ。往生とは死ぬことではない、往って生きること  
ある。永遠の命を信じて生きぬくことである」

山吹「本当に琴路さんは極楽へ往けたでしょうか」

法然「はい、必ず」

山吹「人にいやしめられ爪弾きされる身でも……」

法然「み仏はどのような罪深い者をも嫌わないと申されています。人に嫌われ見捨て  
られ、何も頼る者もないような気の毒な人ほど憐れんで下さるはず」

床下から、頬被りした男がまろび出て、地に伏して泣きます。

熊谷「何者だ！」

男「許してくれ、おれの頭を刺してくれ！ おれは盗賊だ、天野四郎という大悪人  
だ」

熊谷「なに盗賊だと！」（えり首をつかむ）

法然「私の知合いだ、離してやりなさい」

熊谷「ええっ、お師匠さまと泥棒が？」

法然「そなたはとうとう私の所へ来てくれましたな」

四郎「おれの負けだ。いつか、念仏を称えてみろといわれて、その時は笑いとばしたが、この頃妙に氣になりだして、ときどきこの床下にもぐってお前の話を聞いていたんだ。参った、まったくお前には参った……。おれは難しい理窟はわからねえが、お前のいうことならなんでも信じたくなった」

法然「そうか、信じてくれるか」

四郎「おれは今まで悪いことをした奴は絶対に救われなと思ってた。だから地獄へ行く覚悟で盗みや殺生をしていたんだ。だけど、南無阿弥陀仏と称えれば、お前と同じところへ往けるんだな」

法然「そうだ。み仏にとって人間はみんなかわいい子供です。だが情けに甘えて子供が悪事をすれば親は喜ぶだろうか。今からはみ仏を悲しませるような行いはやめることじゃ」

四郎「わかった、よくわかった。(平伏し)どうか、どうか、おれをあなたの弟子にして下さい。お師匠さま！」

法然「よいとも、教阿弥陀仏と名付けよう」

夕闇がせまる中に、若く逞しい僧が現われて、法然に向って合掌します。範宴(はんえん)(後の親鸞)です。

範宴は九歳の時に出家し、二十年間、叡山で仏法を学び、血のにじむような修業を続けましたが、煩惱(ぼんごう)をたちきり悟りをひらくことができず、迷い苦しみ山をおりて、六角堂にこもって百日間の求道の祈願をしました。その九十五日目の明け方、夢の中に聖徳太子のお告(うり)をうけて、この吉水の庵室を訪れたのです。



師の手をとって念仏の中に生きよう  
と誓う範宴。

範宴は、心のありのままをうちあけて、法然にすがり、教えを乞います。仏法の真理とは？ 人間の真実の生き方とは？

範宴「南都の浄土教も天竺てんじく唐土の五師の書も、いささか学んだつもりではございますが、私の心は救われませぬ。私はやはりだめな人間なのでございましょうか」

法然「ならば私もだめな人間です」

範宴「ええっ、なんと申されます……」

法然「あなたのなされた学問や修業は私にも難むずかしすぎた。私の知ることといえは、ただひたすらに念仏を申すこと、この他には何もありません」

範宴「ただひたすらに……」

法然「おのれのはからいを捨ててすべてをみ仏の心にまかせる。われら乱想の凡夫にとって、称名の念仏こそ弥陀の本願にもっともかなった行いです」

範宴「師の御房……」

法然「……（範宴をじっとみつめる）」

範宴「眼がさめました……。今のお言葉を聞き、ようやく念仏のまことの心がわかりました。私のような愚かな身には、念仏の他のどのような修業もかなわぬこと、この上は、たとえお上人にすかさぜまいらせて念仏して地獄へ落ちようとも、けっして後悔はいたしません」

二人の話は続きます。そして、互いに手を取合い、共に念仏の中に生きて行こうと誓うのでした。



信空の読みあげる「七ヶ条の制誡」  
に聴き入る側近の門弟たち。

一方、専修念仏のひろがりと共に、念仏者の中にも、念仏のまことの心を知らず、法然の教えを歪めて解釈し、他人にも間違った教えを説き、風紀を乱すなど、行きすぎやあやまちを犯す者があらわれてきます。すると、それを口実に念仏を弾圧しようとする聖道門諸宗の動きもはげしくなってきました。

そこで法然上人は門弟を集め、一つには諸宗の誤解をとくため、また一つにはみづからを反省してあやまちを正し、まことの信心を築くために、念仏者が守らなければならない七つのいましめを書いて示しました。

これを「七ヶ条の制誡」といいます。

#### 〈第四場〉安楽と住蓮の草庵

しかし、どんな時代でも先覚者の歩む道はけわしいものです。念仏の隆盛を恐れる人々はさまざまな妨害をし、念仏者の中には逮捕されたり拷問をうけたりする人さえ出てきます。

このような世相の中で、安楽と住蓮は鹿ヶ谷で別時念仏（特別の時や日、時刻を定めて称名念仏をすること）や六時礼讃（昼夜を六つの時に分けて、阿弥陀仏を礼拝、讃歎すること）をはじめ、布教につとめました。

二人は若く美声だったので、都の内外に評判となり、多くの人を集めました。ことに女性に人気が高かったといえます。

法然門下でもことに学識がすぐれた善恵房証空は熊谷を連れて訪問し、危険な情勢を話して自重するように注意しますが、安楽と住蓮の布教への熱情はかえって強く燃



安楽・住蓮の草庵に駆けこんで出家を願ひ、する鈴虫と松虫。

えさかるばかりでした。

木枯しが吹く夜更けに、松虫と鈴虫が人眼を忍んで駆けこんできます。後鳥羽上皇の熊野臨幸の留守をねらい、御所を逃げ出してきたのです。

二人は、うわべは華やかでも、内実は虚栄と愛欲にまみれた宮中の生活にむなしさを感じ、み仏の美しい世界で生きたい、と出家を願ひ出しました。

安楽も住蓮もさすがに驚いてとめますが、二人の決心は堅く、願ひがかなえられなければ死のう、とまで思いつめています。

しかし、もし官女をかくまったり尼にしたりすればたいへんなことになります。

「自分たちだけが処罰されるのならよいが、お師匠さまにも同行の衆にもきつと迷惑がかかるだろう……」

安楽と住蓮は迷い悩み、松虫と鈴虫は泣いてすがります。

安楽「助けたい、助けたいとは思いますが……」

住蓮「うむ、私も同じだ。女人のしあわせを願う念仏者として、死を賭してすがってきた人を見捨てることはできぬ」

安楽「そうだな、二人を見殺しにしてはみ仏の心に反する、たとえそのために私たちがどうなろうとも……」

念仏の声がますます盛んになり、諸宗が衰えてくるのを憂えた興福寺の衆徒たちは、境内に群れ集まり合議しました。

そして、旧仏教の立場から「念仏の宗には九つの過失がある」と浄土宗を批判して、

六条河原で首を斬られる安楽。



「専修念仏を禁止し、法然およびその門弟たちを重罪に処するよう」朝廷に訴え出ました。

そのような時におきた松虫と鈴虫の事件は、火に油をそそぐようなものでした。安楽と住蓮は役人に捕えられ、安楽は六条河原で、住蓮は近江の馬淵で、高らかに念仏を称えながら首を斬られました。

#### △第五場／洛東・小松殿

その後、迫害はいよいよはげしくなり、町には念仏を禁止する大きな高札が立ち、荒法師たちは念仏者と見れば乱暴をはたらくようなありさまです。

九条兼実らは法然の身を案じて、小松谷の別邸に迎えて住まわせ、迫害をやめさせようとけんめいに努力しました。

だが、寵愛する官女を尼にされた上皇の怒りはとけず、浄土門の立場は苦しくなるばかりです。今は吹き荒れる嵐から、どうしたら念仏の灯を守り抜くか、門下の人たちは、そのことだけにけんめいでした。

そこに勅命が告げられます。すでに処刑された安楽と住蓮に続いて善緯・性願は死罪、法然は土佐へ、親鸞は越後へ流罪という決定です。他にも数人の弟子の名が流罪の中にあります。

建永二年（一二〇七）二月、世にこれを「建永の法難」といい、時に法然上人七十五歳、生涯最大の試験にあわれたのです。

弟子たちは衝撃をうけますが、法然はびくともしません。

「建永の法難」に際し、門弟たちをいましめる法然。



法然「この身をいとうても生きる間は生き、死ぬときは死するのが人のさだめ、いずこへ行こうとも変わるものではない。辺鄙の地方へ赴いて田夫野人（田舎の人）に念仏をすすめることが私の多年の念仏であった。この法の弘通（ひろくひろまること）は、人はとどめんとすとも、法さらにとどまるべからず……」

噂を聞いて心配した男女の信者たちが、だんだんと庭へ集まってきました。

親鸞「今のお言葉聞き、親鸞喜んで流罪の地へ赴けます。ただ師の御房と同じ土佐でないのが残念……」

法然「それでよいのじゃ。聖光御房はすでに鎮西にあって念仏を盛んにし、金光御房ははるかみちのくを旅して広めている。そしてこたびは、そなたは越後へ、私は土佐へ、この国のすみずみまで念仏を広めるにはまたとないよき機縁ではないか」

親鸞「誓ってお志にそい、雪国に念仏の華を咲かせます」

源智「お師匠さま、なにとぞ私をお連れ下さいませ、お願いいたします」

法然「源智よ、そなたは信空、証空の御房といっしょに都へ残ってほしい。どのようなことがあろうとも、念仏の灯をたやすではないぞ」

源智「はい……」

法然「お二人にも頼みましたぞ」

信空「かしこまりました」

あちこちに、別れを惜しんですすり泣きの声がおこります。

法然「何も歎くことはないのだ。念仏を申す者はたとえ千里の海山をへだてて住もうとも心は一つ、浄土での再会は疑いない。どうか、くれぐれもその日までお身を大



別れをおしむ信者たちに、浄土での再会を説く老法然。

切になされるよう……」

老師にはげまされて、人々は泣きながら念仏を称えます。

しかし、念仏停止の宣告はすでに下されたのです。さからってはさらにどんな大きなわざわいがふりかかるやもしれません。

弟子の西阿は「やめて下され！ お師匠さま、今この時にそのようなお話はゆめゆめ申してはなりません。お命にはかえられませぬ！」と必死にとどめます。

だが、法然上人はたじろぎません。

法然「わたしは、たとひ死刑になろうとも、この事だけは申さずにはおられぬ。南無

阿弥陀仏……」

その強烈な信念の底には人間への熱い愛がたぎっているのです。

「私の言葉信じ念仏を生きる心の支えとする人々を、私は殺されても見捨てはしない——」

いつ、どのような時でも、万民と共にあり、共に生きるという、みんなへの約束の言葉なのです。

弟子たちも、信徒たちも、すべての人々の胸に感動がわきあがり、誰からともなく称えだした念仏が、地鳴りのような力強いどよめきとなっていきます。

そして法然上人は、流罪の地へ向う旅の道中でも、大勢の人々を教化しながら、瀬戸内海の塩飽島をへて四国の讃岐（香川県）に渡り、子松庄の生福寺（現在の高松市の法然寺）にとどまって、この地方の老若男女に念仏をひろめました。その年の十二



エビローグ。『一枚起請文』の群読。

月、罪を許されて都へ帰る途中、摂津の勝尾寺に四年間とめおかれましたが、やがて五年ぶりに京都の地をふみ、東山の太谷の禪房（知恩院勢至堂）へ入られました。だが、老齢のうえに永年の苦勞がかさなつて、翌年のはじめから病床につかれました。

建暦二年（一二二二）正月二十三日、法然上人八十歳で入滅される二日前のこと。源智の願いにより、法然上人は、浄土宗の信心のいちばん大切な肝要を一枚の紙に書いて、後世の人々に残されました。その遺訓を『一枚起請文』といいます。

#### △エビローグ▽『一枚起請文』

もろこし我が朝に、もろもろの智者たちの沙汰し申さるる觀念の念にも非ず。また学文をして念の心を悟りて申念仏にも非ず。ただ往生極楽のためには、南無阿弥陀仏と申て、疑なく往生するぞと思とりて申外には別の子さい候わす。

但三心四修と申事の候は、皆決定して南無阿弥陀仏にて往生するぞと思う内に籠り候也。此外におくふかき事を存ぜば、二尊のあわれみにはずれ、本願にもれ候べし。念仏を信ぜん人は、たとい一代の法を能々学すとも、一文不知の愚どんの身になして、尼入道の無智のともがらに同して、智者のふるまいをせずして、只一向に念仏すべし。



## 『法然』劇の用語解説

宝田正道 たからだ まさみち

前進座の『法然』劇には各層の實在の人々がいろいろ沢山登場してくる。法然上人に帰依した貴賤男女の層がいかに広がったかを物語るものであるが、中には劇的効果を高めるために、フィクション（虚構）として加えられた架空の人物もなくてはならない。脚本はおおむね史実に即して忠実に法然上人像やその周辺を描いているので、ある程度上人伝に通じている人にとっては、わざわざ解説など設ける必要もないが、初めてこれを見る観客にとつては、理解しがたくうつる人物、特に出家が多い。それに、セリフの中には少からず耳馴れぬ仏教用語の類も使われているので、とかく難しく感ずる人もあろう。

そこで、一般にこの劇を観て法然上人の時代や教義を

理解しようとする方々の参考のために、登場人物を中心として、最少限度必要とされる地名・書名・寺名その他難解と思われる用語の類などを、簡単に解説することにした。

順序は、観客の便宜を慮り、劇の進行に伴って理解できるように、プロローグとエピローグを首尾においた二幕十二場という台本の次第に従って並べておく。

### プロローグ （漆間時国の館）

○漆間時国 うるまの時くに 法然上人の父。美作国（現在岡山県）久米南条稻岡庄の豪族として、当時、押領使 おしりょうしの役についていた。押領使というのは土着の豪族の中から武芸に長じた

者が選ばれて群賊奸盜の逮捕や暴徒の鎮圧など、主として治安の任に当らしめられていた荘官のこと。後につけられた法名は、菩提院殿源譽時国西光大居士、行年四十三歳、保延七年三月十九日命終と伝えられている。

○明石定明 稲岡庄の預所で源内武者定明という。預

所は莊園組織において領家（領主）の代理者となり莊務を管理する職名である。伝記では、時国が定明の下知に服すべき地位にありながら、かえって彼を軽んじたことが、兩者私闘の理由になっている。その確執が高じてついに時国の居館へ夜討をかけた、というのである。彼は時国殺害後、逐電したが、三年後には滝口に補されたという。

○勢至丸 法然上人の幼名。長承二年（一一三三）に生れ、永治元年（一一四一）九歳の時父の死に遭う。父時国は四十三歳であった。

○栃之助・お社 時国の家臣夫婦。ただし、夫婦とも架空の人物。

○秦氏 法然上人の母。時国の妻の出自は、帰化系豪族として各地に栄えた名門であるが、秦氏は個人名ではない。ただし、伝記では「母秦氏」とあるので、習慣上、

母の呼び名のごとく使われる場合が少くない。正しくは、帰化人秦氏の出身である母という意味である。後につけられた法名は解脱院殿空譽秦氏妙海大善尼、行年三十七歳、久安三年十一月十二日命終と伝えられている。

## 第巻幕

○嵯峨釈迦堂・清凉寺 京都市の西郊嵯峨にある。宋より赤梅檀の釈迦像を將來した東大寺齋然の没後（一一〇一）、弟子盛算によって栖霞寺（左大臣源融の山莊）の西隣に建てられた法相系の寺院。法然上人は、保元元年（一一五〇）夏、二十四歳にして一時黒谷の觀空のもとを辞し、ここに参籠した。本尊釈迦如来に求法の一事を祈請するためである。現在は浄土宗に帰属する。

○菩提寺 法然上人が、父を討たれた直後、入寺した近郊の寺。当時、叔父（母の弟）に当たる觀覺得業（一説智鏡房）が院主をしていたが、敵の後難を避けるために勢至丸を預つたらしい。現在は、浄土宗に属し、青少年の研修道場として整備されつつある。

○茂右衛門 嵯峨近在に住む富有な農民。ただし、架空の人物。伝説の上では、西山粟生周辺の庄屋に同名の人

がいたという西山派系説教本の影響から、昭和三十六年にその住居趾を示すという記念碑まで創られた。

○お虎 茂右衛門の妻として設定された女性。

○四郎 盗人。後に大泥棒天野四郎となり、やがて法然上人の教化を受けて出家、教阿弥陀仏と名乗る有力な弟子の一人となる。

○西塔黒谷の別所 比叡山五別所の一つ。根本中堂の西北、谷深く、現在は青竜寺のあるあたり。昔は遁世聖たちが多く隠栖して修行していた。境内には一切経を納めた報恩蔵の趾も残っており、近年、知恩院の青少年修練道場が設置された。

○叡空 慈眼房。「黒谷聖人」とも呼ばれる。久安六年（一一五〇）、法然上人が十八歳で入室を乞うた時、彼は第四番目の師として、円頓戒を授けるとともに「法然房源空」という名を与え、天台の要義を教えた。聖として上層貴族の帰依を受け、治承三年（一一七九）二月に寂したというが、定かではない。

○信空 法蓮房。左大弁藤原行隆の子で、保元二年（一一五七）、十二歳で叡空の弟子となる。叡空没後、同門で十三歳年長の法然上人に兄事、以後五十年余り行動を共

にした。法然滅後の念仏教団を支えた高足中最長老ともいうべき存在である。世人は「白川の上人」と称したが、法然配流の際、一時念仏の興行を中止するよう進言したように、性格的には政治的主導権を握れなかった模様である。ちなみに『徒然草』によれば、彼の兄に藤原行長（信濃前司）入道がおり、『平家物語』を作って盲法師生仏に語らせたという。

○一切経 仏の説かれた經典の総称。大蔵経ともいい、経・律・論の三蔵を網羅した一大叢書である。唐代五千数十巻にまとめられたが、後大成されて現在は一万二千巻近くに及ぶ。

○『往生要集』 全六巻。恵心僧都源信の撰した往生の要文集。穢土を厭い浄土を欣求するには、菩提心を発し戒を保つて悪をやめ、三心具足して常に弥陀を念ずべし、と説いて宋にも贈ったという。平安末の末法時代、人心に与えた影響は大きく、中でも地獄の凄惨な描写は美術や文学に取り入れられて盛んに欣浄思想を鼓吹した。法然上人も特に多くの註釈書を著わすほど関心を示し、求道の道しるべとしている。

○『往生拾因』 一卷。永観集。康和三、四年（一一〇一

（二）頃の撰。念仏の一行には十種の因由があるから、一心に阿弥陀仏を称念すれば必ず往生ができると説く。

○『決定往生集』二卷。三論宗珍海撰。保延五年（一一三九）から康治元年（一一四二）にかけての撰。西方淨土往生の道は時機に契うべく、称念弥陀の行に決定往生の信を求むべきを説く。「決定」の意義顯彰を特色とする。

○『觀經疏』四卷。唐善導集記。詳しくは觀無量壽經疏といい、『觀無量壽經』を釈した書。玄義分・序分義・定善義・散善義各一卷より成るので四帖疏、釈義が古今楷定の妙釈であるから楷定疏、九軸の御書という意味で単に御書など、種々の別名がある。善導大師が従来の解釈と異り、本願念仏を重視して説いたため、法然上人は本書を宗義確立の根本指針とし、「偏依善導」を標榜されたのである。特に「一心に専ら弥陀の名号を念じ」云々の一句は、浄土宗立教開宗の文として劇でも強調されているように、法然上人の胸を扶った金言として知られる。

○円照 遊蓮房。信西入道藤原通憲の三男、信濃守是憲。二十一歳で出家、西山広谷に住み、法華經の行者か

ら転じて善導流念仏聖となる。専ら念仏を修して度々靈証を得、一族の者からは仏のごとく尊ばれていた。治承元年（一一七七）三十九歳、法然上人を善知識として寂。上人から人界に生を受けて一番の想い出の人といわれた。

○東大寺大仏殿 南都（奈良）にある華嚴宗総本山東大寺の本尊毘盧遮那仏を安置した殿堂。天平十九年（七四七）着工、天平勝宝四年（七五二）に開眼供養。鎌倉時代になって治承四年（一一八〇）十二月二十八日、源平争乱で平重衡の焼討ちにあい焼失した。約半年の後、養和の頃、俊乗房・重源を勧進職として再建造営に着工、寿永三年（一一八四）大仏の鑄造をほぼ完成して翌年開眼供養が営まれた。金銅十丈八尺の大仏を安置する方十一間二階建の殿堂である。その後、再三罹災、現在は江戸時代の再建ながら世界最大の木造建築として名高い。

○平重衡 平清盛の子。治承四年（一一八〇）の暮、南都を攻めて東大寺等を灰燼に帰せしめ、元暦元年（一一八四）一の谷の合戦で生けどられる。「仏敵」と罵られながら都大路を縄目のまま引廻され、生き恥をさらす。法然上人に説戒を受け、木津河原で処刑された。

○加茂の河原屋 京都加茂の神宮寺近辺にある法然上人の庵室の一つ。上人滅後、勢親房源智が住み功德院と称す。現在大本山である百万遍知恩寺の前身。

○権覚 南都の法師武者として設定。

○義正 同右。

○大原勝林院 比叡山延暦寺の別院として、慈覚大師の開創した寺院。天台声明の根源地として名高い魚山の一角にあり、本尊は丈六の阿弥陀如来。文治二年（一一八六、一説文治五年）秋、後の天台座主顯真あきまことが発起、自坊の大原龍禪寺に法然上人を招いて浄土の法問を聴く会を催した。参会者三百余名と伝えられるが、諸宗の主な碩学としては、光明山明遍、笠置の解脱房（貞慶）、大原の本成坊・明定坊、嵯峨の往生院念仏坊、東大寺大仏勸進俊乗房重源らの名が挙げられる。一日一夜の緊迫した問答、世にこれを「大原談義（問答）」と呼び、法然浄土立宗の浮沈をかけた分水嶺と目される。

## 第二幕

○白河の禪房 現在の大本山黒谷金戒光明寺の地にあった法然上人の草庵。叡山の別所黒谷叡空の所領で、信空

の祖父顯時が中山の別邸をここに築いていたが、法然↓信空と渡り、新黒谷と称して一時教化の中心とした。信空の別名を「白川の上人」というのも、彼がここに住んだからである。

○式子内親王 後白河法皇の第三皇女。平治元年（一一五九）から十年余、加茂斎院いさきいんを勤め、十八歳で退下、和歌に秀でて当時の宮内卿・俊成女と並んで「三才女」と称せられた。伝説として謡曲『定家』には藤原定家との恋物語が創られ、法然上人との文通からは二人の間のプラトニック・ラブさえ囁かれる。建仁元年（一一二〇）没。上人の弟子聖如房しやうにょぼうはこの人に擬せられる。

○宣秋門院 九条兼実の女任子。後鳥羽天皇の中宮となり、父とともに法然上人に帰依して受戒。

○九条兼実 月輪禪定殿下。摂政関白太政大臣藤原忠通の三男。若くして内大臣、摂政となり、ついに太政大臣となつて娘を中宮に上げたりするが、建久七年（一一九六）、失脚して関白の職を甥の基通に譲る。建仁元年（一一二〇）失意のうちに出家、承元元年（一一二七）五十九歳で没す。法然上人に帰依、『選択本願念仏集』撰述のきっかけをつくり、別邸や山荘を提供するなど、大いに

外護者的役割を果す。

○『せんぢくほんねんぶつしゅう選撰本願念仏集』

法然上人の著、略して「選撰

集」ともいう。建久九年（一九八）上人六十六歳の折、九条兼実の請いによって自ら他力本願の深旨を説き、浄土一宗の要義を示された「立教開宗宣言書」とも見られる革命的産物。反駁書や末疏の数も著しく多い。

○熊谷次郎直実 武蔵国の御家人。法力房蓮生。永治元

年（一二四一）武州熊谷館に生れ、源氏の幕下で武勇の名を挙げ平家追討に尽した坂東の荒武者。一の谷の合戦で平教盛の首を討って無常を感じ、頼朝に逆らって出家逐電、法然上人に救われる。不背西方の行者となって上品上生の往生を願い、建永二年（二〇七）九月、予告して六十九歳の生涯をとじた。同門同名の宇都宮弥三郎入道（実信房）との混同を避けて熊谷を「れんせい」、宇都宮を「れんしょう」と呼び分ける習わしが生れたらしい。

○山吹・琴路 遊女の名（架空）。伝記では法然上人が配流の途次、室の泊で遊女を教化したことがある。

○証空 しんくう 善慧房。西山派祖。入道加賀權守親季の子。久

我内府通親の猶子となって、建久元年（一九〇）、法然上人の室に入る。上人『選撰集』撰述の際は勘文の役を

つとめた。常に「白木の念仏」を説き、不浄の時は手を

洗うこと四十八度、恭敬修を専らとした。西山往生院を本拠として、上人滅後まで永く京洛中心の教化を敷いた。宝治元年（二四七）十一月、七十一歳で寂す。浄土宗西山派の派祖として鑑智国師の諡号を賜わる。

○韋提希夫人 いだいぎふじん 『観無量寿経』に説かれる悲劇のヒロイ

ン。インドのマガダ国ビンパシヤ王の妃であったが、子のアジャセ太子の手で幽閉され、釈尊に救いを求めた。これに対して凡夫往生の道を説いて女人救済の教えを垂れたのが『観無量寿経』であるとされている。

○王本願 阿弥陀仏四十八願中、第十八願の「念仏往生の願」をさす。浄土宗義から見てこの願こそ、数ある本願の中でも特に「王」とするにふさわしい、重要で尊いものであるところからこの名がある。

○聖光 鎮西上人。聖光房弁長（弁阿）。筑前国加月庄に生れ、寿永二年（一一八三）比叡山に登って天台を学ぶ。

後、故郷へ帰って油山の学頭となるが、世の無常をさとって建久八年（一一九七）吉水の禅室を訪れ、法然上人に師事、翌年「伝持に堪える法器」として宗義を相承、主として九州で教線を広めた。その義を鎮西流といい、浄

土宗の正流として第二祖の誉れを担う。『末代念仏授手印』等を著わし、嘉禎四年（一二三三）正月、七十七歳で寂す。大紹正宗国師の諡号を賜わる。

○源智 勢観房。平師盛の遺児といわれる。建久六年（一一九五）十三歳で法然上人に入門、慈円に預けられて出家、間もなく上人の座下に帰って常随十八年、上人の臨終には遺訓の『一枚起請文』を授かり、滅後、直ちに報恩のため三尺の阿弥陀像を造立、その胎内に数万名の結縁交名帳を納めるなど、勸進聖として念仏教化に努めた。また、上人二十三回忌にはその廟堂を修理して知恩（教）院大谷寺を興したという。暦仁元年（一二三八）十二月、五十六歳で示寂。

○松虫・鈴虫 宮中の官女。恐らく二人とも歌の上手であつたところから、通称としてこの綽名を得たのである。後鳥羽院が熊野参詣の留守中、法然上人の門弟住蓮・安楽が唱える『六時礼讃』の妙音に魅せられて御所を抜け出し、尼になったというので、院の逆鱗に触れ、いわゆる「建永の法難」の直接原因をつくつた、といわれる。

○『玉葉』 藤原（九条）兼実の日記。一名『玉海』とも

いう。源平から鎌倉初期までの、主として政局や世相の動向を延々六十八冊にわたって叙述してある。

○住蓮 住蓮房乗西。近江国蒲生村馬淵の出身。武士であつたが、法然上人の門弟となり、鹿ヶ谷で安楽ともども『六時礼讃』を修していたところ、官女出家の下手人とされて故郷馬淵で斬首、行年三十九歳という。

○安楽 安楽房遊西。住蓮と同じく武士の出身で、ともに上人の弟子となり、鹿ヶ谷事件で逮捕、六条河原で処刑された。上人が『選択集』撰述の際、執筆役に選ばれたが、高慢な振舞があつたので途中から真観房感西と交替せしめられたという。

○阿波の介 陰陽師。放蕩愚鈍な道楽者であつたが、法然上人に帰依して、意外な才覚を発揮、念仏の教をとるに便利な、浄土宗独特の二連数珠の発案者と伝えられる。奥州に下り、金色堂のそばで正念往生をとげたという。

○範実 後の親鸞。最初は法然上人に綿空と命名される。浄土真宗の祖。日野有範の子。九歳にして出家、慈円の門に入り、比叡山で学び法然上人の弟子となる。藤原兼実の季女（玉日姫→恵信尼）を娶り、非僧非俗、愚禿

親屬と自称、建永の法難に連坐して越後に流されたが、赦免の後には常陸国稲田郷を中心に主として農民の教化に当る。『教行信証』全六巻や和讃など著作多く、浄土真宗を開く。弘長二年（一二六二）九十歳で寂す。見真大師の諡号を賜わる。

○浄土門五師 中国における浄土教の祖師たちのうち特に法然上人が伝法上重視した五人。曇鸞・道綽・善導・懷感・少康諸師のこと。

○七ヶ条制誠 元久元年（一二〇四）冬、南都北嶺の念仏停止訴状に対し、法然上人が染筆して門弟並びに天台座主に提示した起請文。七ヶ条起請文とも呼ぶ。当時の門弟たちの間で一種の「本願ほこり」から旧仏教側の反感をかっていた行業七ヶ条に対する嚴重な禁告と釈明で、末尾には信空以下百九十名が三日間にわたって連署している。原本は嵯峨二尊院蔵。

○六時礼讃 善導の『往生礼讃』の異名。昼夜六時に阿彌陀仏を礼讃する偈頌。美声の僧によるその哀音曲節は、珍しく尊かったので、結縁発心のきっかけをつかむ人も多かったという。

○小松殿 洛東にある平重盛の元別邸。九条兼実の所有

となつてから、彼は法然上人への迫害を案じて吉水の草庵から上人をここに迎えて庇護したという。現在の小松谷正林寺。

○西阿 西阿弥陀仏。法然上人の門弟。

○金光 石垣金光房または金光禪師。筑後国に生れ石垣別所の別当をしていたが、法然上人の門に入り、奥州に下向して各地に念仏を弘通。建保五年（一二二七）六十三歳で彼の地に寂。

### エピソード（『一枚起請文』群読）

○『一枚起請文』 法然上人の遺訓。建暦二年（一二二二）正月二十三日、二日後に死を控えた法然上人が、源智の請いによって授けた紙一枚の誓言書。浄土宗の安心起行として、ただ一向に念仏すべきことを簡明に述べる。主著『選択集』と並んで浄土宗僧侶が日夜に誦誦し、尊重する法語である。後世この文体を好んで流用した和歌、茶の湯、渡世、商人、哲学などの「変形一枚起請文」がいろいろ作られた。幸田露伴は、原文を「日本文で書かれた神品」と激賞している。

## 前進座の歩みとともに

高橋良和



前進座の方々と筆者——誕生寺にて

前進座が昭和六年に独立した。演劇の新しい将来を夢みて前進する劇団のすがたは、当時少年であつたわたしの心をゆすった。年齢をいうと、今の歳がわかるので素通りしておくが、ともかく二十歳までの角帽が似合うか、似合わないかのころである。

東京市村座での公演の際のあの幹部俳優の諸氏の健気な奮闘ぶりは、今でも臉に残っている。それからもう五十余年は流れたのである。

その間、東京に出かけたとき、また大阪の中座や当時在った朝日会館、浪花座、などへもわざわざ

ざ出かけたし、京都公演の南座へもよくかよつて、ほとんど五十年に渡り、前進座の芝居をみている。

特に印象に残っているのは、真山青果作の『元禄忠臣蔵』もの、『一本刀土俵入り』、最近では『阿部一族』などは忘れ難いものがあるし、映画の山中貞雄監督作の『街の入墨者』『人情紙風船』や、木村莊十二監督の『新撰組』あるいは『箱根風雲録』などは、一度や二度重ねて見たことをおぼえている。

こんな古いことを語れるほど、前進座とのつき合いは古い。なにかしら前進座と離れられないようなつき合いである。

戦時中の劇場での公演活動が無理なときは、地方の会館や学校などの巡回のときも、よく観劇した。但し昭和十八年から二十年の年末までのことは知らない。なぜならわたしも召集をうけて外地にいたから仕方がない。おそらく苦しい時代だったので、劇団は苦勞して経営していたのであろう。もちろん今も苦勞であるが、公演活動に併せて食料事情や会場の問題、さらに交通事情などでは、なかなかの苦勞だったらしい。

そんなときには、芳三郎隊、国太郎隊、甞右衛門隊、菊

之丞隊、そして青年劇場といったかたちで、相変らずの意欲的な活動であつたらしいが、そのことは話で聞くだけであるが、よくもまあつづいことである。

その後、今は亡き翫右衛門さんと、ふとしたことからこれも今は亡き樋口富麻呂画伯とともに知り合いになり、さらにその息子である中村梅之助君などと交際をもつようになつてから、いろいろな面で、前進座とのつながりは深くなつた。

そして昭和三十八年のあの『天平の甍』の鑑真和尚の芝居の上演で、前進座の諸君とはとても深いつき合いになつた。特に仏門出身の俳優であつた、これも故人の柚英二郎君とは、親友として、よく我が家にやつてきたし、またその趣味の造型を通して批評しあつて、夜を更かしたものである。

『天平の甍』のときは、劇団の諸君と奈良の唐招提寺に夜半に出かけて、あの天平時代の金堂の外で感さわまつた俳優諸君が、芝居そのままの台詞と身振りによろこばしてくれたことを思い出す。

『親鸞』、『日蓮』、『五重塔』など、凡そ仏教的なものについては、なにかと協力した。特に『親鸞』の制作にかつたときに、翫右衛門さんといっしょに親鸞の遺跡を廻つた

ことは忘れがたい。一つ一つ納得するまで尋ねられて、親鸞のことを知ろうとするあのまじめな探求心には頭がさがる思いがした。

親鸞の終焉の地の京都の街角でカレーライスを食べながら、するどい質問にたじたじしたことが思い出される。このような態度が、前進座の性格として今日うけ継がれているのであらう。

国太郎さんもそうである。そして亡き菊之丞さんも、先代の芳五郎さんもそうであつた。亡くなつた人々が今はよき思い出をもちつづけている。

日蓮の芝居のあと、ふとしたことで柚英二郎君に「なんとか法然上人の芝居を考えてもよいね」と話したことがそのきっかけとなつて、前進座の作品活動を担当してくれる諸君と、吉祥寺の前進座の研究所の会議室で二時間ほど話したのは、もう四年位以前のことである。

そのときみんなが、「とてもバラエティがある方で、充分芝居はやりますよ」と肩をたたいてくれたので、その後どうなることかと案じていたところ、「法然上人のお誕生八百五十年のよき年になんとかやってみよう」という便りをうけて、雀躍りしてよろこんだ。

それから三年はすぎた。

作者の津上忠、そして田島栄、そして演出家の高瀬精一郎の諸氏とは何回となく会って地固めをしたし、その間、小生のもっている法然の資料を提供したりして、ど真剣になつての取材活動がはじまつた。

岡山誕生寺への参拝から、その周辺の遺跡の調査や取材活動にも何回となく前進座の関係者と出かけた。

特に黒谷青竜寺や比叡山での法然の遺跡は、肌を感じるものがあつたらしい。

特に中村靖之介君といえ、この芝居で信空の役をやっているが、比叡山西塔の青竜寺に出かけて、あの雰囲気浸って感激して語ってくれたことが印象的である。

大原の三千院の山内である勝林院や、特に天台声明の權威である天台の天納伝中師の実光院へは何度も訪ねて、あのむつかしい天台声明のはなしを聞いたり、また実際となえてもらつたりして、作曲の尾上和彦氏も大いに参考になつたらしい。

一つの作品を生み出すということは、とてもじゃないが、大変な苦勞である。

そして作品が出来あがつてからも作者の田島栄君は、何度も京都にやってくる。「この作品を書くのは、やはりお寺の雰囲気でなければ気分が出ない」というので、大本山百

万遍知恩寺に何日か寄遇して作品の完成を進めていたが、ここにもみえない努力のあとがあつた。

一つの作品を生み出す苦勞であらう。

舞台にのぼつた作品を批評するのは楽である。よい、わるい、はなしはつく。

しかしその裏にある、すなわち作品の出来るまでの苦勞は、ひと通りやふた通りではない。

今や前進座が、この法然劇をもつて全国縦断公演のスタートを切つたのである。

おそらくこの芝居をみた人は、浄土宗の人だけでなく誰もが感動すると思つてゐる。

法然を知らない人は、法然を知るよき手だてとなるし、法然を知っている人は、自らの心のなかに、法然のおしえを強く強く印象づけるであらう。

なんとかしてこの芝居を成功させたい。

そう思うと全国を一緒にかけ廻つて、そのPRにつめたい心でいっぱいであるが、残念ながら仕方がない。

しかし出来るだけ出かけたと思つてゐるが、その成功を祈るとともに、前進座がとりあげてくれたこの芝居を機会に、鎌倉時代に巨灯をかかげた法然上人を、もっと世に出したいと思ふのは、わたし一人でもないと思つてゐる。

# 法然上人鑽仰と浄土の世界

みやばやし  
宮林昭彦

## 一、日本仏教のあゆみ

インドにおいて、お釈迦さまがはじめて仏教を開かれたとき、仏教は、あきらかにインド社会に根強くはびこっている階級制度を打破して、すべての身分別、性別を越えた人間平等の精神に立脚して説かれたのであります。

しかし、その仏教が、シルクロードを通り、中国、朝鮮半島を経て日本に伝えられる間には、それぞれの国や、その時代と社会とに順応して、大きな変化をとおてきました。

仏教が日本に移入されたのは、六世紀の中頃ですが、日本の社会に根を下したのは、七、八世紀のことです。ちょうどその頃は、わが国は律令国家の発展期に属していました。当時の仏教、いわゆる飛鳥奈良仏教は、学問仏教

であり、伝統的な神祇信仰とともに、律令国家を護持するために保護されていました。それは仏教思想の本質をなす精神的解脱の問題は等閑視されて、むしろ五穀の豊穰や病気の平癒を祈る呪術としての使命を果すことがもとめられたのであります。律令の規定のなかには、仏教が民間に伝道して、民衆を教化することを禁止し、これを犯すものには権力をもって弾圧さえ加えたのであります。

平安時代の仏教は、このような権力の統制下から脱却しようとする自覚から生れ出たものです。伝教大師、弘法大師がそれぞれ天台宗、真言宗を開かれた意義は、そのような歴史的事情によるものであります。しかし、その宗派の教団の基礎を民衆にもとめるかわりに、依然として、政府とそれをささえた貴族の間にもとめられて、御用宗教的な役割を一掃することはできませんでした。

律令国家から貴族政治への展開に伴って、天台・真言の両宗派は、貴族階級に支持され、密教の修法祈禱は、社会的な需要にこたえたといえることもできます。

貴族の支配体制が次第にゆるぎ出したとき、貴族はいままで通り、現世の榮花に酔いしれてばかりはいられません

でした。貴族から武家への政治体制の移行のなかで、時代がくずれおちるようなときに、栄枯盛衰の憂きめや、あらゆる階級を通じて、だれでも免れることのできない死の恐怖が澎湃（ほうはい）としておこってきました。貴族社会の不安があらわになってきたのは、十世紀のころからであって、浄土信仰も急速に高まってきました。

浄土教によって、はじめて政治的な権力の限界が、宗教的なかたちで自覚されてきたのであります。

鎌倉新仏教において、はじめて日本仏教は呪術的性格から脱皮して、仏教本来の精神にたちかえり、「釈尊に還ろう」という大乘仏教徒の理念が、甦ったということができます。しかも、新仏教は、かならずしも支配階級に対して、政治的な叛逆をおこし、民衆の社会的な解放をはかるといったような、社会的秩序を否定して、革命をおこしたわけではありません。秩序と現実面において抗争することを避けながら、もっと人間の本質的な問題から、民衆、大衆のために、万民のための仏教が開かれたのであります。

その人こそ、法然上人であります。

このことは、日本仏教の歴史上において、画期的な事実といわなければなりません。やがて、法然上人の影響をうけて、親鸞、道元、日蓮というような、お祖師方があらわ

れて、十三、四世紀には、新仏教の各宗派はめざましい教団の発展をとげることになります。

## 二、元祖さまの教えと浄土

法然上人を「元祖さま」とお呼びします。それは、念仏信仰をはじめて開かれたというところから「念仏の元祖」といわれますが、鎌倉新仏教の出現は、まさに日本仏教の誕生であり、その意味からして、法然上人は、「日本仏教の元祖」といわれるゆえんであります。

法然上人における仏教のうけとり方の大きな特色は、一口にいうと、時代の認識と、人間に対する洞察のふかさであります。いまの時代を末法五濁の悪世と受けとり、このわたしは、罪惡深重の凡夫と自覚することにあります。

末法という意識は、民衆のあいだにも、時代のくらさを背景として、ふかく人の心にくいこんでいったにちがいありません。そのことが、上人をして、末法の時代に生きる人間性のふかい追求となり、人間のおくそこに潜んでいる、ぎりぎりの心のうごめきの探求に目をそがしめたのであります。

現代の社会生活においても、一見、平和的にみえても、政治倫理の問題、企業体内部における労使のあらそい、家

庭内における人間関係のつめたい葛藤など、また繁榮する巨大な社会のかたすみ、孤独さに泣く人々をつぶさにみると、いまさらに人間の心のあり方のむずかしさが思われてくるのであります。

法然上人は、お念仏の教えを説かれる場合に、「仏道修行は、よくよく身をはかり、時をはかるべきなり」と語られていますように、いつも時代と、そこに生きる人間に注目をされています。

あらそいのない平和な世界の実現ということは、人類の悲願でありましょう。その悲願実現のために現代の人間はたたかひを続けているといえます。この矛盾を感じないところに、現代の不幸があるのです。法然上人が選ばれた道は、うらむことのない世界の実現、恩讐のかたの世にいたる道の追求でありました。

上人の一生は、そのことを実践的に示しています。自分と相手、敵も味方もすべて平等の立場においてみることで、それは自力においてではなく、阿弥陀さまの本願をふかく信ずることにおいて、自分ひとりではなく、衆生ともどもそのすくいにあずかる、という証しをたてられているのであります。

お釈迦さまは、人間を一切の権威と独断から開放し、そ

こに人間のあるがままのあり方を自覚し、発見されたのですが、現代においては、お釈迦さまのすがたを、法然上人その人の上に拝み、すくいを感得することができるのであります。

それは、全人類の上に限りない希望をあたえ、人間生活を根本から新しくした人ということができましよう。

わたしたちの生活する現実の世界―差別があり、相対立する有限の世界、これを彼岸といい、これを越えた彼岸の世界、み仏の住したもう世界を、「極楽浄土」「浄土」といいます。

浄土とは、すべての苦しみ悩みから解脱した涅槃（ねはん）の世界であります。それは、人生の生死のくさりから解放された、真実の安楽の世界であり、あらそいのない絶対平和な世界をいうのであります。

また、それは、菩薩（ぼさつ）行の力で出現した功德の世界であり、真に生きぬく働きをもつ生命の世界ということができましよう。このように、涅槃の世界が浄土といわれることによって、み仏の住処である意味が、一層あきらかにされるのであります。

この浄土は、穢土、すなわち現実にながしたちの住む世界に対してたてられたものであります。人間が、ほんとう

に生きる道を失い、煩惱や妄念に引きずられて、不安と焦燥におおわれつつ、罪惡をつみかさねてゆく濁乱の穢土に對して、かぎりない光りある生命のかがやく浄土が建立されているのです。

その浄土は、西方十万億土にあるといわれます。穢土に對して、浄土がたてられるとき、その両土の距離は、十万億土のはるかかけはなれた存在といわなくてはならないでしょう。なんとすれば、浄土は、夢想したり、妄想したりして実現しうるものではなく、み仏だけが実現しうる世界だからであり、わたしたち衆生の能力では、とうてい実現することのできない世界だから、それは十万億土のかなたといわれるのです。

しかし、阿弥陀仏（あみだぶつ）の浄土が、たとえ十万億土のかなたにあるとしても、わたしたちのゆくことのできない、かなたではなく、阿弥陀さまの願力によると、それは即得往生であり、一瞬にしてふみこえることができるのであります。しかも、確實で、きわめて簡易にできるのであります。ゆえに浄土は遠くて近い存在ということができません。それは、ただ「なむあみだぶつ」のお念仏のなかに味得されるものであります。阿弥陀さまの願力には、すべての生きとし生ける衆生の願いや、祈りがこめられてお

り、お念仏とともに生活するとき、みずからの力が最大限に發揮されることになります。

### 三、法然上人讃仰会と『浄土』

法然上人によって確立されたお念仏の信仰は、やがて、浄土宗の二祖聖光上人（鎮西上人）、三祖良忠上人（記主禪師）と伝承され弘まっております。日本仏教の大きな流れのなかには、念仏門としては、直接弟子となり、「師法然の仰せならば地獄へまでも」といわしめた親鸞上人が、浄土真宗を開かれ、のちに時宗を開かれた一遍上人が、つく法然上人の説かれたお念仏の指南をうけています。

やがて、日本も封建制度が確立して、身分秩序が動かすことのできないものとなった江戸幕府の統治下の社会において、仏教が国教的に擁護されてくると、かならずしも鎌倉新仏教の精神が躍動的にはたらかず、むしろ枯渇してきました。

そして、幕末維新の変革期における廃仏毀釈のあらしは、神仏分離令が出され、仏教を廃し、釈尊の教えを棄却する運動がおこり、仏教寺院、仏像などが破壊されることとなりました。

このような情勢のなかで近代における仏教運動の特色

は、危機意識が礎となって、仏教護法の覚醒的な動きとして展開しました。とくに大正から昭和にかけての運動は、デカダンス的な風潮と、やがて戦争へ傾斜をしていく時代背景のなかで、訓詁的な解釈の伝道ではなく、生命のかよったものとして、原点に還ろうという運動としてすすめられたのであります。

それは、かつて鎌倉新仏教の「釈尊に還ろう」という叫びが、いま「元祖に還ろう」という時代的要求のなかで、一方には、釈尊を中心とした「真理運動」がおこり、他方では「法然上人の真精神に魅らう」という旗じるしのもとに「法然上人鑽仰会」が創設されたのであります。

「法然上人鑽仰会」は、大正大学元学長真野正順博士、大正増上寺執事長中村弁康上人を中心として、大正大学、

(説) (解) (紙) (表)

長承二年(一一三三)四月七日、美作国稲岡庄で法然上人はお生まれになった。その折、ふた流れの白幡が椋の梢にたなびいて、幼い勢至丸さまの誕生を祝福したという。時は流れて八五〇年、私たちは今、法然上人の念仏の教えをありがたく受けとらせていただく。

表紙絵 「稲岡の里」長田芳一画

浄土宗門関係者、「法然上人鑽仰」の趣旨に賛同する一般政財界の人々の参加をえて、昭和十年四月に創立されたのであります。

その当時、不定期あるいは季刊の信仰雑誌は、二、三刊行されていましたが、本格的な月刊誌は稀有でした。雑誌『浄土』が本会の機関誌として華々しくデビューしたとき、仏教界はもとより、宗教界、一般出版界でも、多に刮目されたのであります。

『浄土』誌面には、「信仰のみちびき」から「念仏信仰の真髓」などにいたるまで、また広く文芸を通じて、法然上人の崇高なみ教えが、縦横無尽に飾り立てられたのであります。この『浄土』に文豪佐藤春夫氏が、法然上人の伝記「掬水譚」を、中里介山氏が「黒谷上人夜話」を連載し、また岡本かの子女史や吉田絃二郎氏が常時執筆して、宗内外一般各界に多大の反響をよんで、「仏教ルネッサンス」という言葉が流行したのもその頃でありました。

その後、わが国は、戦時体制に突入し、思想、信仰の弾圧など、暗い重苦しい世相となりましたが、「法然上人鑽仰」を通して、念仏信仰の火はかかげられ、戦後の混乱期にも消えることなく、常夜灯のごとく、ともしつづけられて、今日に至っています。

編 集 後 記

○昭和五十七年は法然上人お誕生八五〇年の佳辰にあたり、改めて私たちははるかに法然上人のことを想い、念仏信仰への熱い願いを確認した。私自身も、縁のある念仏道場で営まれた幾つかの慶讃行事に参加させてもらい、遠く鎌倉時代に想いを馳せた。そして、勢至丸さまの幼い日のことともや法然上人のやさしい温顔を心に描いてみて、こうして今日私たちが唱えさせていだいていいる「南無阿弥陀仏」の尊さとそのありがたさを受けとらせていただいた。

浄 土 月 刊

＝半世紀に渡って刊行されてきた浄土念仏の心のよりどころ。『浄土』誌は暖かい心を寄せ合う和の世界＝

A5判 本文48頁

年会費 3000 円

●多くの方々に読んで頂くことを広くおすすめいたします。

○さて、この生誕八五〇年の慶讃企画のひとつとして、劇団「前進座」が人気役者中村梅之助丈を主役に配して、『法然』劇上演を興行されたことは、まさに私たちに与っては青天の霹靂ともいえるすばらしい出来事であった。役者としての誠意と努力をもって、法然上人になりきって演じられた梅之助丈の熱演と、嵐圭史丈をはじめとする劇団員一丸となつての好演は、京都・南座や東京・読売ホールにおける公演によってすでに私たちの目と耳と心に強く感動を焼きつけている。この公演は、今年に入っても、大阪を皮切りに全国に巡演されるわけであるが、ここに劇作家田島榮氏の新たな書き下ろしを得て、前進座『法然』劇のあらすじを誌面に一挙に掲載させていただき、改めて法然上人への想いを広く喚起したいのである。

○法然上人讃仰会は、念仏信仰のよりどころとしてもらうべく月刊誌『浄土』を、ともかくも半世紀近くに及んで刊行してき

た。長い年月に渡って、多くの方々のご助力を仰いできたが、今回は、ここに臨時増刊号を製作し、法然上人への讃仰の念を心から強めるのである。  
(勝崎裕彦)

浄 土 四十九巻 臨時増刊号

定価 二〇〇円 千五〇円

昭和十年五月二十日  
第三種郵便物認可

昭和五十八年二月二十日 印刷  
昭和五十八年二月二十五日 発行

編集人 宮 林 昭 彦  
発行人 佐 藤 密 雄  
印刷人 関 二 三 男  
印刷所 長谷川印刷株式会社

東京都千代田区飯田橋一―十一―六

発行所 法然上人讃仰会

電話東京二六二局五九四四番

〒一〇三 振替東京八―八二一八七番

田島 栄・作  
高瀬精一郎・演出

# 法然

市田尾原熊野  
川村上

隆二・美術  
英一・照明  
和彦・音楽  
正・効果  
舞・監督

源平の合戦とあいつぐ天災地変  
無明の間をさまよう人びとを  
一人も洩れなく救わんと願い  
念仏を称え  
せいっぱい生きよと  
はげまし続けた法然上人  
日本の大地に  
万人のための仏教を確立した  
大いなる宗教改革者の波瀾の生涯

法然上人お誕生八五〇年記念

## 前進座公演

法然上人

中村梅之助



- 推薦／浄土宗 総本山知恩院 大本山増上寺 大本山金戒光明寺 大本山百万遍知恩寺  
大本山清浄華院 大本山久留米善導寺 大本山鎌倉光明寺 大本山善光寺大本願  
西山浄土宗 浄土宗西山禅林寺派 浄土宗西山深草派
- 後援／全日本仏教会 真宗教団連合

仁平 津上 泰章・制作  
忠・同

昭和58年度公演予定

3月1日(火)→20日(日) 名古屋・栄 中日劇場

お問合せ…☎052(201)3070

名古屋市中区栄2-3-6 富久屋ビル 前進座

4月→7月

全国巡演

お問合せ…☎0422(49)2225・2633

東京都武蔵野市吉祥寺南町3-13-2 前進座

東京都千代田区一ツ橋1-1 100 振替東京4 56534

毎日新聞社

新刊 念無き人々  
三國志 全五巻  
寺内大吉 著  
松満達文 画



松満達文 画

# 念無き人々 三國志

法然をめぐる人々

## 全五巻

寺内大吉

定価各1,300円(千55)

直木賞作家が10年の歳月をかけて遂に完成！  
香り高い歴史ロマンの大作

巨大な仏教改革者法然とは……。周囲に集う僧俗男女の群像を通してその人間像を浮き彫りにする力作。最初の念佛の盟友となった遊蓮房円照をはじめ、深い人間愛で結ばれた勢親房源智、仏師連慶らが多彩な人間模様を展開する

第四十九巻

臨時増刊号

昭和十年五月二十日 (第三種郵便物認可) 毎月一回一日発行  
昭和五十八年二月二十日印刷 昭和五十八年二月二十五日発行